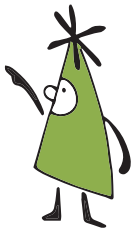
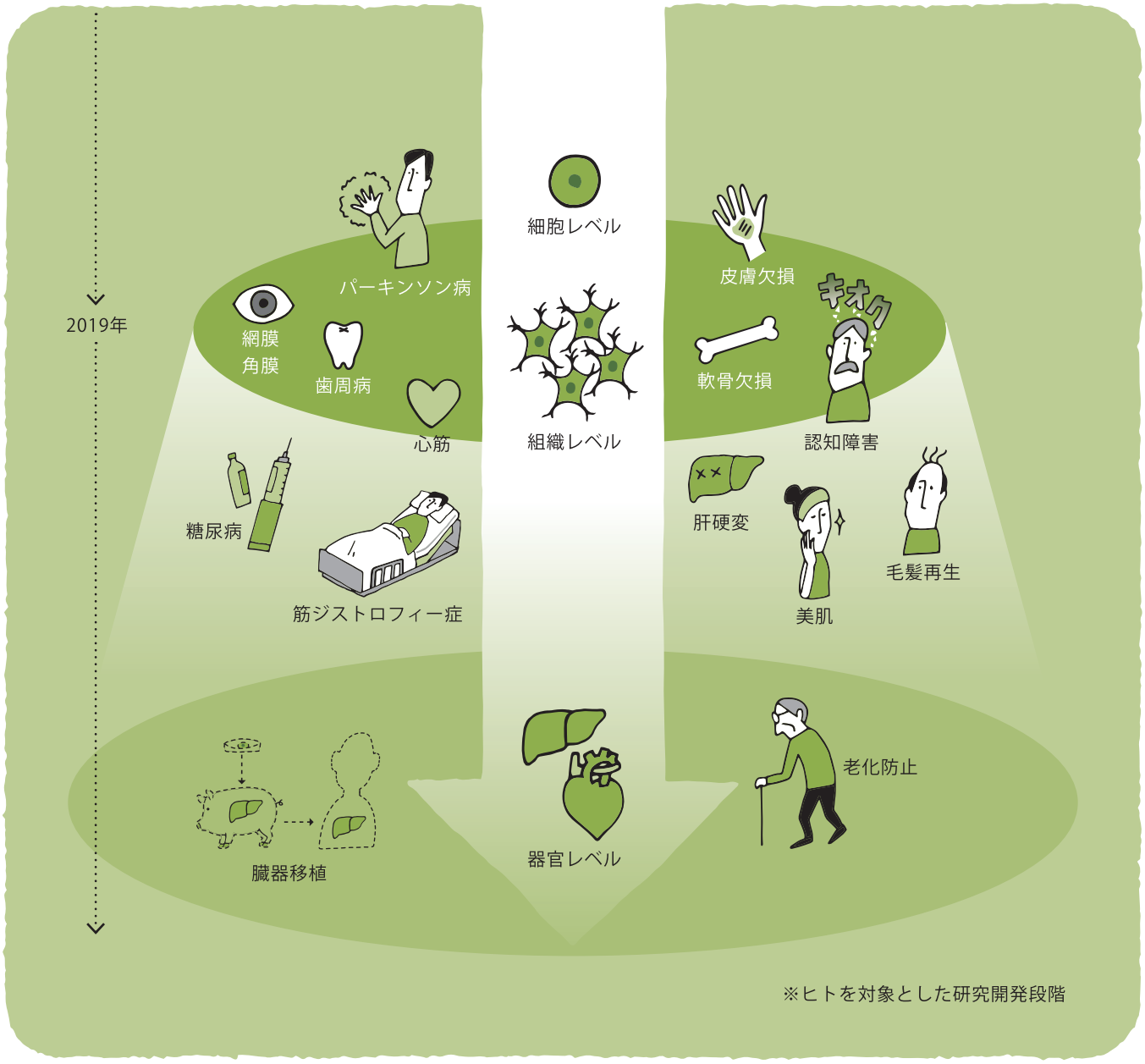
議論しよう！

新しい医療と、くらし

～再生医療のあるべき未来像～

「これまで大変だった治療も、生活に差し障りがない程度にまでなるかもしれない」
「今まで治らなかった病気が、治るかもしれない」
「いつまでも美しい肌を維持できるかもしれない」
iPS 細胞を利用した「再生医療」が、いよいよ現実味を帯びてきました。
ニュースや新聞で取り上げられるにつれ、様々な期待が高まってきますが、
一方で、倫理観、宗教観、人としての尊厳などの観点から、慎重論も出ています。
私たちの社会は、こういった医療のあり方、生命のあり方について、
どういったことを「大切」にし、「何をよしとするかしないか」を考えればよいのでしょうか。

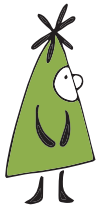




万能な治療の可能な世界？

再生医療の進んだ世界を想像してみましょう。
どんなことが期待できますか？
今までのように薬を飲んだり、手術をするのとは別の形で「人間の再生能力を活かして病気を治す」ことが考えられます。今までなら、「再生」することができなかったような器官や臓器を、自分の細胞から作ることができるかもしれない。もしかしたら治らない病気はなくなるのかもしれない。いやいや、それができるなら永遠の美も手に入れることができるかもしれない。
これらはまさに「病気」という概念を、根底から覆す「可能性」を示唆するのです。

memo iPS 細胞とは

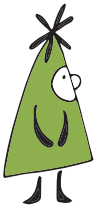


人工多能性幹細胞（iPS 細胞：induced pluripotent stem cell）のこと。体細胞に特定因子（初期化因子）を導入することにより樹立される、ES 細胞に類似した多能性幹細胞。山中教授グループの研究により、世界で初めて 2006 年にマウス体細胞を、2007 年にヒト体細胞を用いて樹立に成功したと報告された。
（参照：http://www.cira.kyoto-u.ac.jp/j/faq/glossary.html 京都大学 iPS 細胞研究所（CiRA））

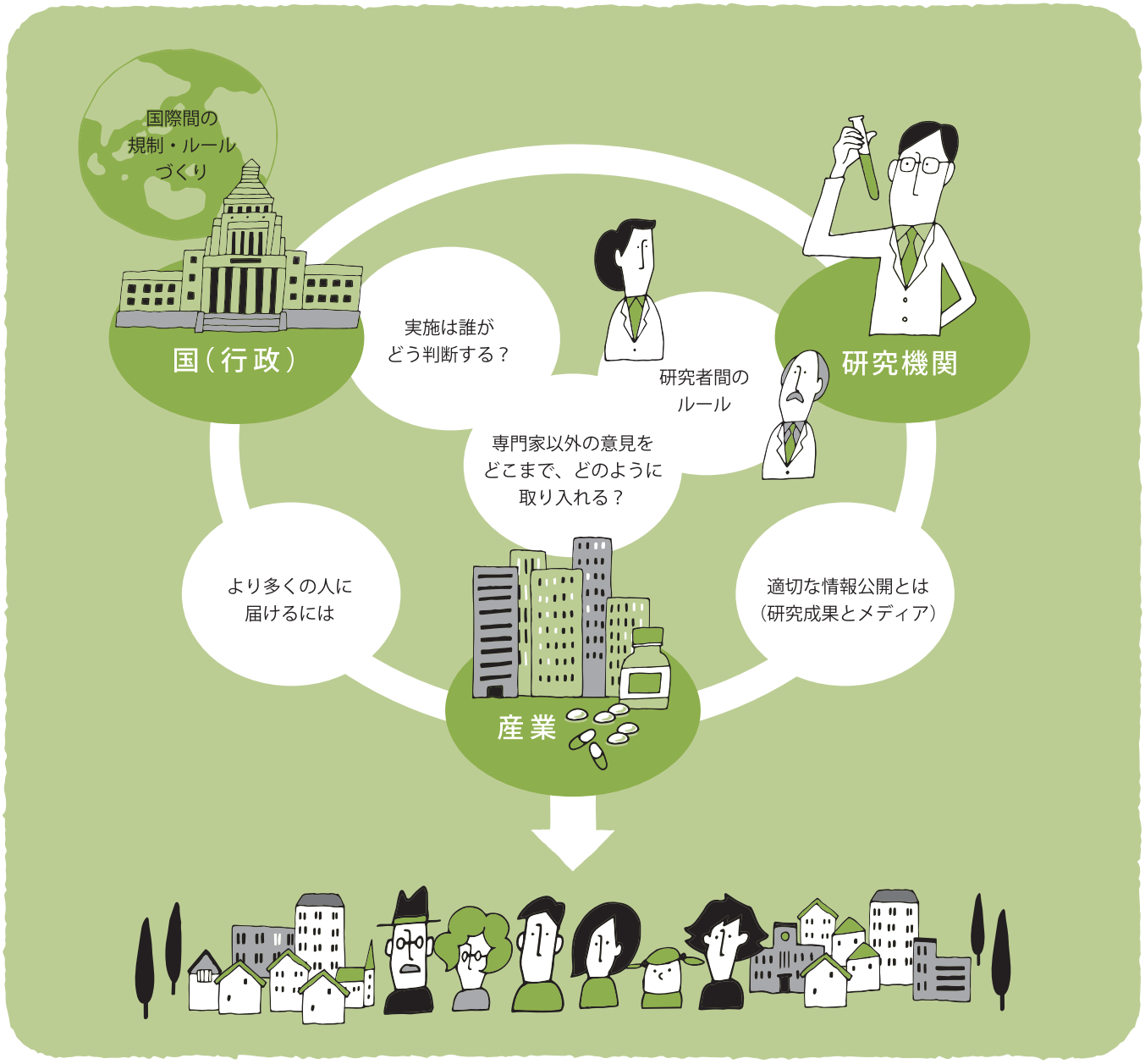
では「なおす」って何だろう？

だとすると、そもそも「病気」って何だろう？「健康」って何だろう？
何をもって「異常」「障害」というのか。
「健康」とはどういう状態なのか。
そう考えると、そもそも「病気」という概念さえあやふやで、
治療するという行為そのものの線引きがはっきりしません。
再生医療を使ってよいのかどうかを決めるためには、それぞれのもつ倫理観、宗教観や文化的背景、
美意識に至るまで、様々な価値観や考え方を考慮する必要があります。

memo 治療とエンハンスメントについて



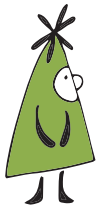
健康であるかどうか、治療すべき状況であるかどうかは、ここからここまでは健康、これ以上は治療すべきというように線引きができるものではなく、人間と社会と環境の相互作用の中で、その線引きの基準や概念も変化しうるものという考え方があります。
また同時に、治療と治療を超えるもの（エンハンスメント）の区分も容易ではありません。
エンハンスメントは、再生医療を含む先端生命科学が向き合わなければならない課題の１つです。



科学の推進と、私たちのくらし

再生医療のような次世代の医療技術が世界に広がるのは、人類として意義のあることでしょう。
一方で、どの国も同じ基準、同じ規制で開発が進められているわけではない、という課題も。
「生命」の重みが、国によって不均衡になってしまうことを助長することになるかもしれません。
また、産業とのつながりや、社会に与える影響も考慮しなければなりません。
私たちの知らないところで「よかれ」と進められている「研究」。
「くらしの主役」である私たちは、何を大切にして「生命の可能性」に向き合うべきなのでしょうか。

memo 次世代の医療がかかえる倫理課題



いのちを扱う再生医療は、とくに多くの人々がその完成を待ち望んでいる分野です。しかしその一方で、倫理観や、宗教観、文化などの違いによって、推進についての賛否が分かれるのはもちろん、とくに再生医療の場合は、誤った認識や古い情報のもとで議論されたり、ある種のバイアスが影響を与えたりしやすい分野です。また「医療行為」とそうでないものとの線引きも、問題になってきます。研究者と医療機関、行政、産業、マスコミ等との情報共有が、ますます重要になってきます。

企画・制作：八木絵香、水町衣里　/　監修：八代嘉美、標葉隆馬　/　デザイン・イラスト：アトリエ・カプリス
2019 年 10 月版